

## [原著論文]

一般精神病院におけるOTの展開方法と現状  
—看護職員へのアンケートを通じて—

伊藤こず恵

キーワード：看護、プログラム、効果

Methods and the current impression of OT's in mental hospitals  
—Through a questionnaire directed to nursing personnel—

Kozue Ito B.A., O.T.

## Abstract

Cooperation with nursing personnel is indispensable, and important for the occupational therapist. We investigated via a questionnaire, the expectations of nursing staff in a mental hospital toward occupational therapy. This investigation's goal was to provide feed back to the OT department. New programs in occupational therapy were made based on this investigation. The features of these programs included advertisements concerning OT, social life activities, communications activities, and the rest. These are considered basic in daily life activity. In addition, the effect of the execution of the programs concerning change in patient's and OT's was confirmed through a second questionnaire to nursing personnel. Dissatisfaction with the OT department was found to have decreased after analyzing the second questionnaire. This change was a result of altered expectations from nursing personnel. An important aspect of this questionnaire is that nursing personnel judged the effects of OT's, but not the occupational therapist. The effects of OT's, the patient's change due to OT's, and the change in attitude toward OT's were confirmed by supplying the questionnaire to nursing personnel. It was important to have confirmed the effects of OT's, patient change due to OT's, the approach of the OT department, and the change in nursing personnel attitude by giving the questionnaire to nursing personnel. The problem's and the target's of OT's were found by providing the questionnaire this time.

Key words : nursing, program, effect

## 要旨

作業療法（以下OT）にとって看護部門との連携は欠かせないものであり、重要である。そこで看護からのOTへの期待をOT科にフィードバックするために、1次アンケートを施行した。これを基にOT患者のプログ

ラムの再考を試みた。プログラムの内容は日常生活活動の基礎となる、休養、社会生活活動、コミュニケーション活動やOTの啓発活動の要素を取り入れ実施した。さらに、アンケートとして看護部門からみたOTプログラムを施行することによる患者の変化・

伊藤こず恵 有田病院 診療部 作業療法士

[連絡先] 〒957-0014 新発田市金谷197  
TEL : 0254-22-4009

効果を確かめた。その結果、2次アンケートではOTに対する不満が減少した。これは看護部門の期待を取り入れアプローチをした結果と考える。OT自身が効果を判断するのではなく、他職種である看護部門にOTの効果やOTを施行することによる対象者の変化・効果があるいは、OT科の取り組み方や姿勢の変化をアンケートによって確かめたことが重要な点である。今回アンケートを実施したことによりOTへの問題点を焦点化することができ、今後の課題も見つけることができた。

## I はじめに

医療はチーム医療と呼ばれており、対象者を取り囲み、各医療従事者が存在する。医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士、心理士などA院でも様々なチームスタッフが存在する。様々な患者に応じて様々な職種や部署機関との連携が必要となる。<sup>1)</sup> A院でのOTは開設して約5年が過ぎようとしている。急性期治療病棟、精神療養病棟（開放）、精神療養病棟（閉鎖）を対象とし、OTを実施している。急性期治療病棟は3ヶ月を退院の目処としており、療養病棟は、長期入院者が大半である。統合失調症、気分障害、知的障害、てんかん、人格障害、神経症などの患者がOTへ参加している。

OT科は、開設して日が浅く、経験年数も少ないため、看護部門とOT科との連携不足が見られる。それにより、部門間の情報交換が円滑に行われず、看護部門のOTに対する現状の認識不足が生じている。看護部門とOTは、密接な関わりが必要であり、それにより患者へのアプローチをより充実したものにすることができる。そこで今回アンケートを施行し、看護部門から見たOTの現状を把握し、OTへの期待をフィードバックすると共に、OTの効果を確認した。

## II 方法

### 1. 対象者

精神科OTを実施している病棟職員を対象にアンケートを実施した。急性期治療病棟、開放病棟、閉鎖病棟の看護職員計48名に実施した。

### 2. アンケート内容（資料参照）

アンケートは自己記入式質問調査票を作成し、実施した。項目は、1) 対象者の基本属性について①性別②経験年数③職種の3項目とした。2) OTについての意見①精神科OTにおいて重要である主な対象者②OTの目的③OTより提供してほしい患者の情報④OTの手段として求める作業活動⑤OTに対する満足度⑥OT実施後の患者の変化⑦OT科への今後の要望⑧OTの活動目的  
\* 2次アンケートのみ2質問追加⑨新プログラムの評価⑩新プログラムについての感想・印象との10項目とした。

### 3. 実施方法

#### 1) アンケートの実施

現在のOTの見直しのためアンケートを通し、今後のOTについて検討していきたいことを説明後、ベースラインとして1次アンケートを平成15年11月に施行した。回収日を10日後とし、各スタッフのアンケートを病棟師長が収集し、OT科が各病棟のアンケートを回収した。

#### 2) OTの介入

OT科でK J法を使用し、介入プログラムを作成した。介入プログラムの内容は、①休養・熟成活動<sup>2)</sup>の充実のために休憩所（豊部屋）の設置、②社会的活動<sup>2)</sup>、コミュニケーション活動の充実のために、新聞・雑誌・テレビゲームの導入、③啓発活動として作業分析をし、その作業内容の検討を行い、作業分析のポスター作成をした。OTのプログラム内容の充実と啓発活動への働

きかけを、平成15年11月から平成16年2月に施行した。

3) 再アンケートの実施

平成16年2月に再度同じアンケートを施行し、OTに対する効果の判定を行った。

Ⅲ 結果

1. アンケート結果

アンケート回収率は100%である。

1) 基本属性について (表1)

①性別

女性34名、男性14名で男女比率では女性が70%、男性30%であった。女性の方が2倍程度であった。

②経験年数

上位から0~10年、21~30年、11~20年、31~40年の経験年数の対象者の順となった。0~10年の経験年数が多数で全体の60%を占めた。経験年数の少ない対象者が全体を占める結果となった。他の経験年数はさほど変化がなかった。

③職種

看護師が全体の40%を占めた。准看護師、看護補助はほぼ同数の30%を占めた。

以上の性別、経験年数、職種は、2次アンケート同様変化は見られず、同じ母集団からアンケートを取る事ができた。

表1 対象者の基本的属性について

n=48

	項目	1回目 指数	2回目 指数
性別	男性	14 29.2%	14 29.2%
	女性	34 70.8%	34 70.8%
経験年数	~10	32 66.7%	32 66.7%
	11~20	6 12.5%	5 10.4%
	21~30	7 14.6%	8 16.7%
	31~	3 6.3%	3 6.3%
職種	看護師	19 39.6%	19 39.6%
	准看護師	14 29.2%	14 29.2%
	看護助手	15 31.3%	15 31.3%

2) 精神科作業療法について

①重要であるOTの主な対象者 (表2)

1次アンケートでは、上位より統合失調症、知的障害、人格障害者が挙げられた。その他の意見では「全ての患者に対象である」が挙げられている。これは2次アンケートでも変化は見られなかった。

表2 重要であるOTの主な対象者 (複数回答可) n=48

	項目	1回目 指数	2回目 指数
対象者	統合失調症	41 44.1%	37 46.8%
	感情障害	7 7.5%	5 6.3%
	アルコール	2 2.2%	2 2.5%
	知的障害	21 22.6%	22 27.8%
	神経症	3 3.2%	2 2.5%
	摂食障害	1 1.1%	0 0.0%
	人格障害	9 9.7%	7 8.9%
	てんかん	3 3.2%	0 0.0%
	その他	6 6.5%	4 5.1%

②OTの目的 (表3)

1次アンケートでは、上位より社会適応能力の改善、日常生活活動の改善、知的精神的機能の維持があげられている。その他の意見では「現状維持も大切なのではないだろうか」「個別に記されている以上に目的がある」と挙げられている。2次アンケートでは、上位より社会適応能力の改善、日常生活機能の改善、余暇活動の指導が挙げられている。知的精神的機能の維持から余暇活動の指導へと結果に変化が見られた。

表3 OTの目的 (複数回答可)

n=48

	項目	1回目 指数	2回目 指数
目的	社会適応能力	38 40.4%	28 32.6%
	日常生活能力	24 25.5%	26 30.2%
	余暇活動	9 9.6%	10 11.6%
	知的精神活動	10 10.6%	4 4.7%
	認知心理機能	2 2.1%	3 3.5%
	就労・就学	5 5.3%	1 1.2%
	身辺処理能力	2 2.1%	7 8.1%
	運動機能	3 3.2%	6 7.0%
	物理環境	0 0.0%	0 0.0%
	その他	1 1.1%	1 1.2%

③OTより提供してほしい患者の情報 (表4)

1次アンケートでは、上位より対人交流、集団参加技能、作業遂行能力が挙げられている。2次アンケートでは上位より対人交流、集団参加技能、コミュニケーションが挙げられた。作業遂行能力からコミュニケーションへと結果に変化が見られた。

表4 OTより提供してほしい患者の情報 (複数回答可) n=48

	項目	1回目 指数	2回目 指数
情報提供	対人交流	27 19.6%	26 22.0%
	コミュニケーション	14 10.1%	17 14.4%
	集団参加	26 18.8%	24 20.3%
	作業遂行能力	22 15.9%	9 7.6%
	趣味興味	11 8.0%	10 8.5%
	生活管理	2 1.4%	5 4.2%
	知的精神的機能	8 5.8%	5 4.2%
	生活時間	2 1.4%	1 0.8%
	身辺処理能力	6 4.3%	7 5.9%
	役割	1 0.7%	1 0.8%
	協調性	17 12.3%	11 9.3%
	職業特性	0 0.0%	0 0.0%
	その他	2 1.4%	2 1.7%

④OTの手段として求める作業活動 (表5)

1次アンケートでは、上位より生活技能訓練、レクリエーション、軽スポーツと挙げられた。2次アンケートでは、上位より生活技能訓練、軽スポーツ、生活管理が挙げられた。1次、2次アンケート同様、生活技能訓練が上位に挙げられている。2次アンケートでは新たに生活管理が上位に挙げられた。

⑤OTに対しての満足度 (表6)

1次アンケートでは、どちらともいえないが60%程度占めており、満足している、不満足という意見が17%と同数であった。意見も様々あり、「現状で満足している」「治療の個別化」や「誘導方法の工夫が必要」、「社会復帰プログラムの実施」などが挙げられた結果となった。2次アンケートでは、1次アンケート同様、どちらともいえないが60%程度であったが、不満足が減り、満

表5 OTの手段として求める作業活動 (複数回答可) n=48

	項目	1回目 指数	2回目 指数
作業活動	革細工	0 0.0%	0 0.0%
	紙細工	1 0.8%	4 3.7%
	籐細工	1 0.8%	0 0.0%
	編物	1 0.8%	2 1.9%
	木工	0 0.0%	2 1.9%
	陶芸	4 3.1%	3 2.8%
	ビーズ手芸	1 0.8%	5 4.6%
	縫物	3 2.4%	0 0.0%
	音楽	1 0.8%	4 3.7%
	レクリエーション	17 13.4%	6 5.6%
	パズル	0 0.0%	0 0.0%
	ワープロ	0 0.0%	0 0.0%
	囲碁・将棋	0 0.0%	0 0.0%
	軽スポーツ	16 12.6%	16 14.8%
	ゲートボール	2 1.6%	1 0.9%
	写真	4 3.1%	1 0.9%
	散歩	5 3.9%	6 5.6%
	習字	2 1.6%	0 0.0%
	茶道	1 0.8%	0 0.0%
	華道	0 0.0%	1 0.9%
	織物	0 0.0%	0 0.0%
	染物	0 0.0%	0 0.0%
	文芸活動	5 3.9%	2 1.9%
	生活管理	11 8.7%	11 10.2%
	生活技能訓練	23 18.1%	18 16.7%
	家事	6 4.7%	6 5.6%
	簡易作業	7 5.5%	8 7.4%
	食事	8 6.3%	5 4.6%
	交通手段利用	3 2.4%	5 4.6%
	休息	0 0.0%	0 0.0%
社会資源利用	5 3.9%	1 0.9%	
公共機関利用	0 0.0%	1 0.9%	

足度が17%~24%まで上昇した結果となった。1次アンケートでは不満足が全体の17%程度であったが、2次アンケートでは2%程度までに減少した。

表6 OTに対しての満足度

	項目	1回目 指数	2回目 指数
満足度	大変満足	1 2.1%	1 2.4%
	満足	8 16.7%	10 23.8%
	どちらでもない	31 64.6%	30 71.4%
	不満	8 16.7%	1 2.4%

⑥OTでの患者の変化 (表7)

1次アンケートでは、患者が変化したという意見は17%程度であり、どちらともい

えないという意見が75%であった。意見では、「自主的に参加する人が増えた」、「日常生活には変化が見られない」などの意見が挙がっている。2次アンケートでは、やはり患者が変化したという意見は18%とほぼ同等であり、どちらともいえないという意見が80%と同等の多数意見であった。変化が見られないという意見は、1次アンケートでは8%程度であったが、2次アンケートでは2%程度に減少した結果となった。

表7 OTでの患者の変化

n=48		項目	1回目 指数	2回目 指数
患者変化	変化した	8	16.7%	8 17.8%
	どちらでもない	36	75.0%	36 80.0%
	変化なし	4	8.3%	1 2.2%

## ⑦OTへの要望(表8)

1次アンケートでは上位より備品の充実、スタッフ数の増加、組織の確立が挙がっている。その他の意見では、「個々に関する対応の充実」「作業内容の改善」「参加目的だけでなく指導も必要」などの意見も挙がっている。2次アンケートでは、上位より備品の充実、その他、スタッフ数の増加が挙げられた。その他の意見では、「OTの内容」「各個人の目的」「作業療法士自身の向上」などの意見が挙げられた結果となった。

表8 OTへの要望

n=48		項目	1回目 指数	2回目 指数
要望	スタッフ増員	10	23.8%	9 22.5%
	備品充実	13	31.0%	14 35.0%
	組織確立	8	19.0%	3 7.5%
	経済面の充実	3	7.1%	1 2.5%
	その他	8	19.0%	13 32.5%

## ⑧OTの活動目的(表9)

1次アンケートでは、上位よりレクリエーション、社会的活動、ADLが挙げられた結果となった。その他の意見では、「対象者

別に目標があると思う」、「病気を治すこと」が挙げられている。2次アンケートでは、上位より社会的活動、ADL、レクリエーションが挙げられた。1次アンケートではレクリエーションが1位を占め35%程度であったが、2次アンケートではレクリエーションに変わり、1位が社会的活動と変化し40%を占められた。

表9 OTへの活動目的(複数回答可)

n=48		項目	1回目 指数	2回目 指数
作業目的	生きる	18	18.6%	21 27.6%
	生産	4	4.1%	8 10.5%
	レクリエーション	34	35.1%	18 23.7%
	社会活動	27	27.8%	28 36.8%
	成熟	14	14.4%	1 1.3%

\*2次アンケートのみ2質問追加

## ⑨新プログラム評価(表10)

上位より、休憩所、新聞・雑誌、ポスターが挙げられた。

表10 新プログラム評価(複数回答可)

n=48		項目	1回目 指数	2回目 指数
評価	休憩所			20 33.3%
	新聞・雑誌			19 31.7%
	ゲーム			6 10.0%
	ポスター			13 21.7%
	その他			2 3.3%

## ⑩新プログラムに対する感想・印象

意見をそれぞれ筆者が、賛同と解釈できるものをプラスの意見とし、疑問と解釈できるものをマイナス意見とした。

休憩所に関するプラスの意見では、「なじみの関係ができそうでよい」「コミュニケーションの場にもなり、又症状の安定にも役立ってくるのではないかと思う」などが挙げられた。マイナスの意見では、「もっと有効な方法があるのではないかと思う」が挙げられている。全体的にはプラスの意見が多い結果となった。

新聞・雑誌に関してのプラスの意見では「社会との接点になり、情報源となるので興味、関心が持ててよい」「雑誌などは自分で買いにいけない人もいるのでいいと思う」「自分の目で見るので色々な情報を得る事が出来るのでよい」などが挙げられた。マイナス意見では、「今後多種多様な物が必要なのではないだろうか」「そっちの方に気がいってしまうのではないだろうか」が挙げられた。

テレビゲームに関しての意見としては、プラス意見では、「ゲームを通し交流が持てればよい」「楽しみが増えた」などが挙げられた。マイナス意見では「加齢者には難しいゲームが多い様に見える」「ゲームだけに参加し他は参加しないのでは？」などの意見が挙がった。

ポスターに関してのプラスの意見では、「協調性の心が生まれ、助け合いの心が持てればよい」「作業状況が解りやすかった」「何をしているのかが解る」「OTの紹介でいいと思う」「活気が伺える」の意見が挙げられた。マイナスの意見では、「誰に向けてのアピールなのかわからない」「患者の写真を貼るのは良くないと思う」などの意見が挙げられた。

#### IV 考察

##### 1. プログラムの介入

看護部へアンケート実施後、休憩・熟成活動、社会生活活動を取り入れ、段階付けしやすいように作業活動の見直しを行った。休憩所の設置、新聞雑誌、テレビゲームの購入をすることで休息→社会活動→集団参加への段階付けが可能となった。今までは休憩するスペースがなかったため、他者が作業活動をしている時間は休憩できなかった。そのため適応できない患者の途中帰棟がみられた。しかしOT室で安息空間を提供することで、少数ではあるが参加回数の少

ない患者の参加があり、途中帰棟する患者が減少した。居場所の確保の重要性<sup>3)</sup>が述べられているように、OT室での休憩は重要な役割を果たしている。安息空間提供は患者にOT参加しやすい環境を提供することができ、そして患者のペースで作業することができるようになった。実際のOT場面では、統合失調症の患者が、道具を媒介とし、他者と交流を持つようになったことが観察された。以前はOT室に来て、他者との交流がほとんど見られなかったが、テレビゲームを媒介とし、自分で道具を用意したり、スタッフにやり方を聞いたり、他患と一緒にゲームをしたりする場面が観察され、道具を通して人と交流を持つようになっていった。テレビゲームや新聞・雑誌を購入したことで、それらを媒介とし患者同士でのコミュニケーションが発展し、社会活動へより参加しやすくなったのである。表10より休憩所や新聞・雑誌が上位に挙げられたように、これらプログラム改善で、社会活動の重要性が認められ、2次アンケートにより回答の変化も見られた。

表3よりOTの目的では、日常生活活動の改善の支持率が上昇し、社会適応能力の改善と僅差がない結果となった。これらはOT室には以前になかったゆとりの空間ができ、OTへの見方が変化したためと思われる。

表7よりOTからの患者の情報提供では、1次アンケートにはなかったコミュニケーションが上位に挙げられる結果となった。今後は看護と共通の評価を実施することによって看護とより密接に関与することができ、様々な視点での評価が可能になるとと思われる。

表9よりOTの活動目的は、1次アンケートでは、余暇活動が上位を占めていたが、2次アンケートでは、社会活動が上位を占める結果となった。

## 2. 今後の課題

表5より作業活動の手段では、2次アンケートより、生活管理が新たに加わった結果となった。以前は余暇活動が上位を占めていたが、2次アンケートでは余暇活動よりも日常生活により密接した実務的な作業活動が占められた結果となった。1次、2次共に生活技能訓練は上位に挙げられており、今後は現在の作業成分には足りない、日常生活活動あるいは、SST (social skills training) など生活障害へのアプローチが求められている。現在SSTはOTでも看護でも実施していない。そのため、日常生活訓練を行い、衣食住に関連した家事一般の生活訓練が今後必要となってくるのではないと思われる。OTでは、症状があるために困難となっている生活をどうしたらその人らしく暮らしていけるかを考えていかなければならない<sup>4)</sup>。A院では慢性期の患者が大半を占めており、慢性期での障害との付き合い方や長期入院での生活習慣などの改善は必要になってくる。

患者の変化に関しては、1、2次アンケート同様どちらともいえないという意見が80%を占めた結果であった。不満足度は1次アンケートに比べ15%程度減少した結果となった。逆に満足しているという意見が7%であるが上昇する結果となった。これは、他部門が問題としていることに働きかけ、OTの効果が確認された結果だと思われる。しかしマイナス意見も多くあり、今後に向けてはこれらの課題を少しずつ改善していくことでOTへの理解が深まるのではないと思われる。今後の精神科OTに求められることは、対象者のニーズに合わせ、施設に応じたプログラムを創造していくことが作業療法士に求められている<sup>5)</sup>。施設に沿ったOTの展開が必要となり、そのためには、作業療法士自身が技術を磨くことが重要になってくる。そして情報の提供、共有、

啓発活動、OTプログラムなどの働きかけは重要になると思われ今後の課題である。

謝辞：有田要院長には備品購入の際にお力添えをして頂き誠にありがとうございます。深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 山根 寛：精神障害と作業療法 第2版4巻 三輪書店 106 2003
- 2) 山根 寛、二木 淑子、加藤 寿宏：ひとと作業・作業活動 第1版1刷 三輪書店 8 1999
- 3) 小林 正義、富岡 詔子：「作業への閉じこもり」の治療的利用、作業療法、第20巻、472-482、2001
- 4) 新宮 尚人、落合 美穂、河合 桃子ら：慢性期の長期入院患者を対象とした教育的プログラムの試み、作業療法、第22巻、253-261、2003
- 5) 向 文緒、美和 千尋、鈴木 國文：精神科作業療法に従事する作業療法士の問題意識とプログラム構成、作業療法、第22巻、537-544、2003

